

【研究ノート】

外国人からみた日本のスポーツにおける「ふしぎ」

— 2016 リオ五輪における日本人アスリートの立ち居振る舞いに着目して—

‘Mysteries’ of Japanese sports as seen from foreigners

— Focusing on the behavior of Japanese athletes in the 2016 Rio Olympic Games —

ライトナー・カトリン・ユミコ

LEITNER, Katrin Jumiko

1. 「これほど異なるものか」 — 日本で観た 2016 リオ五輪

2016年は、ブラジルのリオデジャネイロにて第31回夏季オリンピック大会が開催された。南米諸国初の開催となったこの大会において、日本の選手は多くのメダルを獲得し、大きな活躍を遂げた。大会期間中、地球上でブラジルの真裏にある日本では、新聞やテレビ等のメディアを通して日本人選手のメダル獲得や活躍に関するニュースが毎日のように報じられ、国民の注目を集めた。

日本在住のオーストリア国籍である筆者も、「Rio 2016」の報道には関心を寄せながら世界的なスポーツの祭典である五輪大会に関するニュースや生中継を注意深く観察していたが、初めて日本国内で観たオリンピックは、今まで主に母国であるオーストリアで観てきた放送とは大きく異なっていたことに、驚きを禁じ得なかった。なぜなら、それはメディアの報道において大々的に取り上げられた日本人選手の、オリンピックというものに対する考え方や、(競技)スポーツそのものへの取り組み方による立ち居振る舞いが特殊であり、外国人の選手に比べると、あまりにも独特なものであると強く実感したからであった。

8歳から柔道を続けてきた筆者は、竹の棒を使って子どもを「指導」する町道場の指導者、大学柔道部や実業団における3~5時間にも及ぶ長時間の練習、また、その練習中の選手による掛け声や「声を出す」ことへの指示等、日本のお家芸である柔道の特徴及びその特殊性については既にある程度理解しているつもりであったが、リオオリンピックの報道を通じて海外からみる、更なる「ふしぎ」が日本のスポーツには多く存在していることを改めて発見することができた。これらの「ふしぎ」というのは、主に日本人アスリートの行動や態度に関わるものであり、さらに、柔道等といった日本的な武道種目だけでなく、他競技の選手にも若干みられたものである。海外では、現在競技として世界中に広く普及されているものであっても、日本の武道から発展している柔道競技やその他の武道種目に関しては、他のスポーツ種目とは異なったものであるという認識、つまりその礼儀や相手に対する気遣いも重視する「ただのスポーツ」ではなく、スポーツ以上の「何か」があるという認識はあり、それゆえに親が子どもに勧める種目としても高く評

価されているといえる。そのような考え方から、海外では武道種目に対する取り組み方等が独特であることは広く知られているが、それ以外の種目における日本人のアスリートにも、これと共通している部分があるというのはそれほど知られていないのではないと思われる。武道だからこそというよりも、日本人だからこそみられる特徴なのだという点が見出されることに関しては、筆者も「Rio 2016」の報道を通じてその特徴が至る所に見出されることに驚きの連続であった。

本研究ノートは、2016リオ五輪における日本のメディアによる報道を通じて、外国人からみた日本のスポーツや日本人アスリートにおける「ふしぎ」を明らかにすることを目的とする。具体的には、主にテレビの生放送で取り上げられた日本人選手を対象に、外国人選手と比較をする視点から、彼らの立ち居振る舞いと何が大きく異なるのか、さらに、外国人にとって日本人選手のどこがどのように「ふしぎ」なのかを整理する試みである。本稿は、柔道競技において日本人選手と長年触れ合ってきた筆者の経験を背景に、きわめて個人的な見解や解釈に基づいたエッセイ的な検討であり、様々な国やその文化等による多様な考え方を厳密に考慮し、一般的にどこまでそれが広く受け入れられているかどうかの確認作業は行われていない。したがって、ある一個人の見方や受け止め方に過ぎないものではあるが、日本におけるスポーツ（文化）を多様な視点から考える際に、日本人にとっても外国人にとっても何かヒントや気づきになるような基礎的資料として提示しておきたい。

II. 海外からみた日本と日本人—ジャパノロジーという学問から

欧米諸国には、ジャパノロジー (Japanology) という、日本語をはじめ、日本の歴史、文学、社会及び文化等を幅広く研究する学問分野がある。日本学や日本研究とも呼ばれるが、主に外国籍の研究者が日本の様々な事柄や現象、または日本人の精神や考え方等について、海外からみた見解や所見を明らかにするものである。さらに、その多様な研究による知見が研究論文としてだけでなく、より広く多くの人の手が届くような一般著書としても出版されることが多い。これらの研究や著書においては、外国人からみた日本及び日本人とは、多少「不思議 (strange, mysterious)」、「謎 (a mystery)」や「一味違う (slightly different)」とされている一方で、日本人の生き方や考え方に「憧れ (admire)」、「魅了 (fascinate)」されている外国人が多いことも共通して述べられている (Christopher 1983; Davis and Ikeno 2002; De Mente 2004; Hendry 2013; Maguire and Nakayama 2006; Moore 1969)。このような日本や日本人に対する少々理解の困難さを伴いながらも肯定的な見方や評価を行うというのは、近年日本でも頻繁に耳にする「クール・ジャパン (Cool Japan)」という名称の下で、日本の文化面が国際的に評価されている現象として現れており、日本政府による対外文化宣伝や日本人作家による様々な著作物として、日本からも幅広く発信されるようになってきている。

そのような中で、外国人からみる日本のスポーツについてはどのようなことが言われているのだろうか。ジャパノロジーという分野では、「武士道」や「武道」というのは大きな研究対象の一つであるといえる。また、柔道や剣道、合気道及び柔術等、日本の武道は、世界的に実践者も

多く人気が高いこともよく耳にするであろう。そこでは、柔道にみられるような競技種目として試合での勝ち負けを目指す競技者もいれば、武道の精神やその礼儀等に魅了され、「人間形成の道」として武道に取り組む人も大勢いるであろう。

メディアスポーツとして世界的に注目を集めているオリンピック種目に関していえば、それぞれの国のスポーツ事情にもよるが、海外で活躍をしている日本人アスリートも増えつつあるため、彼らの競技に対する取り組み方や考え方等についても、様々な情報が徐々に知られるようになってきているのではないかと考えられる。例えば、筆者の母国であるオーストリアの場合は、ウィンタースポーツが盛んなため、日本人のスキージャンプ選手やアルペンスキーの選手は、オーストリアを練習拠点にしていることもあり、彼国のテレビでもインタビュー等で取り上げられ、広く知られている。

オーストリア人からみた彼らの印象というのは、多少特定の人物に限ったものではあるかもしれないが、「勤勉であり、熱心に練習をし、謙虚に競技に取り組んで素晴らしい」が、「必要以上に頑張りすぎる」⁽¹⁾こともある一方、「陽気で面白い」⁽²⁾や「楽しそう」という多様なものである。が一方で、その印象というのは、言葉の壁とそれによる限られた表現力等によって表面的なことにとどまっているとも感じたりする。そこで、海外より少しでも彼らの「本当の姿」に近いものが映されているであろうと思われる、日本国内のメディアで取り上げられている日本人アスリートを対象に、彼らの姿をより詳細に描き、さらに、彼らが外国人にどのようにみられ、思われているかについて一つの見解を示したいというのが、本研究ノートの主な狙いである。

Ⅲ. リオ五輪報道を通して見た日本人アスリートにおける「ふしぎ」な立ち居振る舞い

本稿では、リオ五輪に出場した日本人アスリートにみられた、主に3つの立ち居振る舞いについて考えてみたい。それらは、多くの日本人からすると、おそらく当たり前のように受け止められるものであろうと考えられるが、外国人からすると、文化的な背景等による違いから、おそらく違和感のある行動が多いのではないと思われる。彼らの立ち居振る舞いについて、外国人選手の事例と比較をしながら何が大きく異なるのか、また、オーストリア人である筆者からみてどこがどのように「ふしぎ」なのかを述べてみたい。

1. 「金メダル宣言」

「オリンピックは、勝つことではなく参加することにこそ意義がある」という近代オリンピックの創立者であるピエール・ド・クーベルタン男爵による有名な言葉は世界的に知られているが、近年のオリンピックに出場するトップアスリートの多くにとって、オリンピックにおいて金メダルを取ることの方が、競技人生の最大目標であるに違いない。唯一、特別な基準によってオリンピックへの出場が認められている、スポーツがさほど盛んに行われていない国や地域の選手だけは、おそらく試合で勝つことより、オリンピックへの出場を喜び、その雰囲気等を楽しもうと考えているであろう。

しかし、そうした中で、多くの日本人選手が、メダル候補でない選手を含め、大会前に「金メダルを宣言」する風景は、日本の「Rio 2016」報道で初めて目の当たりにした。柔道やレスリングをはじめ、体操や水泳等の選手でも、特に、メディアに対するインタビューにおいて、「必ず金メダルをとる」や「絶対に金メダルを持って帰る」というような宣言をするアスリートを見て、「堂々と宣言ができてすごい」と率直に思った一方で、「このようなことを言ってしまって大丈夫か」と心配にもなり、複雑な気持ちであった。

世界ランクの上位に入り、オリンピック前の様々な国際大会において優勝の経験もあり、優勝の最有力候補と言われる選手であれば、金メダルが取れる自信もあるであろうことから、実際にその目標を言葉にすることによって、自分自身の目標をより明確に現実的なものにしようとする意識を高めることは、選手によってはオリンピックへの一つの備え方であるかもしれない。しかし、それほど金メダルが期待されていなくても金メダルを取る宣言する選手を見ると、自分自身に余計なプレッシャーをかけているようにしか見え、なぜこのような発言をするのか「ふしぎ」に感じる。

オーストリア人選手のメディア対応と比較してみると、(金)メダル⁽³⁾を取る可能性について聞かれる場合は、多くの選手が「(金)メダルについてはあまり考えずに一試合一試合を大事にして全力を尽くしたい」や「特にオリンピックでは、何が起きるかはわからないので、(金)メダルについては深く考えていない」等のようにコメントをする。つまり、どちらかという、とにかく自分自身に余計なプレッシャーをかけないように慎重に答えるアスリートが多いのだ。それだけでなく、その競技の誰もが認める、ほぼ金メダル確定といわれる選手でさえ、メディア側が世の中の注目が集まるであろうビッグ・ニュースになりうるメダル獲得宣言という答えを引き出そうと、しつこくメダルに関する質問を繰り返しても、以上のようなコメントで交わし、メダル宣言は極力しないような対応をするアスリートがほとんどなのである⁽⁴⁾。

この「金メダル宣言」をジャパノロジー分野においてもよく議論されている性格的特徴という観点からみると、一般的には謙虚で控えめ、アピールを好まないといわれる日本人が積極的にメダルを取る宣言をしているのに対して、普段の生活ではアピール感が強いといわれる欧米人の方がむしろメダルを取る確率について慎重に答えているという姿は、非常に「ふしぎ」なことであると考えられよう。個人的には、歴史的に「根性論」に基づいて語られてきた日本のスポーツだからこそ、「実力を度外視して、誰もがとにかく強い気持ちや志をみせなければならない」等のようなスポーツというものに対する精神力を賛美する理由から、多くの選手が、義務のように金メダル獲得を宣言してしまうのではないかと考える。このような「スポーツに対する独特なジャパニーズ・マインド」に関する検討は、今後の課題であろう。

2. 「負けたら謝る」

金メダル宣言と同様に、「負けたら謝る」という2016リオ五輪に出場した多くの日本人アスリートにみられた立ち居振る舞いも、外国人からみる日本のスポーツにおける謎の一つであると

いえる。その中で、そもそもそこまで金メダル候補として期待されなかったであろうという選手でさえ、インタビューで泣きながらも謝るとするのは、「ふしぎ」な光景であった。

オーストリアにおいて、サッカー等といったチームスポーツの場合は、個人のミスでチームが負けたときは、テレビのインタビュー等のメディア対応においてチームメイトに謝るという風景は度々見受けられる。しかし、個人競技の場合は、アスリートが、特に「なぜ」という理由も、「誰に」という対象となる人物も述べずに、とにかく（金）メダルが取れなかったことを「謝る」ということはない。この場合には、期待に応えられなかったこととその原因について、自分自身の感情や感想を表現し、試合のパフォーマンスを分析するということが一般的であるのではないかと考えられる。

おそらく日本人の場合には、応援してくれている人やサポートしてくれている指導者、あるいは家族及び友人に対して謝っているのではないかと推察はできるが、実際に「誰に」そして「なぜ」謝っているのかは、日本人でない身としては理解しがたいことであるといえよう。通常負ける原因を考えてみても、「何等かの理由で実力や持っている力を発揮できなかった」、「その日は相手が自分自身より強かった」や、「判断ミスをしてしまった」等は推察される。いずれも意図的に負けるようなものでなく、したがって、（当事者が）謝らなければならないものとして受け止めなくてもいいと解釈される。また、「Rio 2016」における報道を振り返ってみても、「謝って当然」や「謝るべき」と、選手の謝る姿に納得するメディア関係者や元アスリートであるテレビの解説者もいないように捉えられる。それだけでなく、「十分に頑張っていましたね。本当にお疲れ様です。」という日本的な言い回しで、むしろ選手を励ます場面が多くみられたことから、むしろアスリート以外の様々な人には選手たちが金メダルを取る難しさと、彼らが競技以外の生活を犠牲にしてまでその目標に向けて世界と戦って頑張っている過程こそが評価されているように見える。このような対応のズレをみていると、選手以外の人々の方が、オリンピックで（金）メダルを取ることの難しさをアスリートより理解し、オリンピックというものをより現実的に捉えているような印象は受けてしまう。

しかし、日本人ならではの性格やそれによる考え方という視点から謝っている日本人選手の立場になってみると、もしかすると負けた原因を分析すると世間的に言い訳や責任逃れと批判される恐れがあるということから、対外的にはわざと試合内容やパフォーマンスを冷静に分析しないのではないかと考えられる。応援されている人にどのように見られるかという、周りの目を本人の評価に直結するものとして受け止め、それが「負けたら謝る」という立ち居振る舞いにつながるのではないかと考えることはできよう。

3. 「相手を称えない」

スポーツにおいて試合で負けるというのは、様々な理由はあるものの、基本的には、相手がより強かった、速かった等、パフォーマンスがより優れていたからであるといえるのではないだろうか。さらに、より優れたパフォーマンスを発揮できたその相手を称えるという行為も、オリ

ピック等といった国際的なスポーツイベントではよく目にする。しかし、筆者が日本でみた2016リオ五輪の報道で取り上げられた日本人選手には、そのような行為をとるアスリートを一人も見ることがなかったというのは、本稿で述べる日本のスポーツやアスリートにおける3つ目の「ふしぎ」である。もちろんどうしても相手を称えなければならないわけではなく、また外国人選手の誰もがそのようなことを行うわけでもないが、今まで多くの外国人選手にみられたこのような行為を日本人選手において（筆者が見る限りにおいては）一切目にしなかったというのは、衝撃的なことであった。

「負けたら謝る」という行為に対する解釈に類似しているが、相手を称えることによって敗因を自分自身に起因させるのではなく、誰かのせいにするような言い訳や責任逃れと思われる可能性がこのような行動をとる原因の一つとして考えられるのではないだろうか。しかし、可能な限り準備や調整を経て、最高の状態で臨んだ大会において、自分自身のベストパフォーマンスや実力をすべて発揮ができたのに、最終的に負けて銀メダルに終わるという展開も、特にオリンピックにおいて度々みられるが、その場合には、優勝をした相手とそのパフォーマンスを率直に称えていいのではないかと筆者は考える。ましてや僅差で勝負した相手は、常に競い合って厳しいトレーニングや練習を乗り越えてきた者同士としてその苦労を一番に理解できるからこそ、金メダル獲得を称賛するというのは、むしろスポーツマンシップそのものなのではないかとも考えられる。それは、自分自身を否定してしまうということではなく、さらには、競技人生を終えなければならないことを認めることでもないであろう。

IV. 外国人の日本人アスリートに対する「疑問と尊敬」

以上、2016リオ五輪に出場した日本人アスリートを対象に、彼らの立ち居振る舞いに関する3つの「ふしぎ」について検討してみた。が、これらの検討は筆者による個人的な印象であり、「ふしぎ」につながる原因を推察する解釈も一個人の見解にすぎないと言わざるを得ない。当然ながら、より多くの観察や所見等に基づいた客観的な検討が必要であるが、「Rio 2016」の報道における日本人アスリートにみられた行為は、外国人選手には高い確率でみられないであろうと思われる独特なものであったということは言えるであろう。さらに、その日本的な立ち居振る舞いは、あまりにも外国人選手とは違いすぎて異様なものであったためか、外国人には理解困難であり、説明のつかない「ふしぎ」な現象であった。しかし、ジャパノロジー分野においても日本及び日本人について一般的に指摘されているように、「ふしぎ」だから非難をするのではなく、むしろ外国人として到底考えが及ばない彼らの行動の背景を認めるだけでなく、さらに一步踏み込んで自分自身にはできないであろうという考えから尊敬を払う人すら多くいるのではないかともいえる。それは、本稿のテーマである日本人のオリンピックアスリートに関していえば、彼らの多くが金メダルという大きな責任を負い、誰にも頼らずに一人で世界と競おうとする覚悟でオリンピックに臨む姿に対してであり、多くの外国人アスリートがそのことに敬意を表するものであるからに違いない。

本稿では、外国人からみた日本人アスリートの「ふしぎ」とはどのようなものかを明らかにすることを主な目的とし、彼らの立ち居振る舞いにつながる原因を仮説的に述べてみた。それは、「根性論」や「精神力」といった、多くの日本人がスポーツと密接に結びつくものとして考えられているキーワードを通じて、日本人アスリートの立ち居振る舞いを説明しようとするものであった。その他に、「勝利至上主義」、「我慢」や「頑張る」等といった、スポーツに対する独特な「ジャパニーズ・マインド」も、外国人からみた「ふしぎ」を明らかにするためのヒントとなるであろうと考えられる。その「ジャパニーズ・マインド」と日本のスポーツとの関係を、ジャパノロジーの観点から歴史的な背景も含め検討することが今後の課題となるだろう。

注

- (1) 湯浅直樹（アルペンスキー）は、ヘルニアによって体がほぼ動けなかったにもかかわらず、ワールドカップのレースに出て、ゴールインした瞬間に倒れた。そして、日本チームのスタッフが本人を外へ運ぶというシーンがオーストリアのテレビで放送されたとき、日本チームのオーストリア人監督がテレビのインタビューにおいて、湯浅選手をこのような状況でレースに出場させたということに対し強く批判された「事件」があった。オーストリア人監督は、本人がこのような状態でもどうしても出場したいというので仕方なく出場を認めざるを得なかったと答えたとき、同じオーストリア人のインタビュアーは非常に驚いた様子であった。その事実がオーストリアのメディアを通じて広く知られるようになり、「競技スポーツにかけるものは、競技での成功か身体の問題か」等について様々な議論を巻き起こす程のニュースとなったのである。
- (2) 特に、原田雅彦（スキージャンプ）や佐々木明（アルペンスキー）は、勝っても負けても常に笑顔で、さらに、片言のドイツ語で冗談も交えながらインタビューに答える場面が頻繁に放送され、オーストリア人に愛される人気者になった。
- (3) そもそも、金メダルが常に期待されているアルペンスキー等のメジャーな競技種目を有する強豪国オーストリアでも、最初から銀メダルや銅メダルを完全に除いて、金メダルに限ってのメダル獲得とその可能性や確率についてインタビューや取材をされることは滅多にない。
- (4) 日本の柔道に相当するオーストリアのアルペンスキー競技では、歴史的に金メダル獲得への期待は常に大きいですが、絶対的な金メダル候補者であっても、メディアに対するインタビューでは金メダルを宣言する場面はほとんどない、といえる。

参考文献

- Christopher, Robert C. (1983) *The Japanese Mind. Witty. Wise. Utterly Fascinating. The first book to illuminate every aspect of Japanese life and culture*, New York: Fawcett Columbine.
- Davies, Roger J. and Osamu Ikeno (2002) *The Japanese Mind. Understanding Contemporary Japanese Culture*, Singapore: Tuttle.

De Mente, Boye Lafayette (2004) *Japan's Cultural Code Words. 233 Key Terms That Explain the Attitudes and Behavior of the Japanese*, Singapore: Tuttle.

Hendry, Joy (2013) *Understanding Japanese Society. Fourth Edition*, London and New York: Routledge.

Maguire, Joseph and Masayoshi Nakayama (2006) *Japan, Sport and Society. Tradition and Change in a Globalizing World*, London and New York: Routledge.

Moore, Charles A. (1969) *The Japanese Mind. Essentials of Japanese Philosophy and Culture*, Honolulu: University of Hawaii Press.